『お熱い夜はいかが？』

大谷　美智浩

人物

木島伸一
小春
春雨次郎
春雨小夜子
鈴木千恵子
加藤喜久江
加藤幸一
坂田　瞳
電気屋
鈴木健太郎

場所

レストラン「かもめ」のフロアー

1

一幕

正面に大きな旧式のクーラーと積み上げられた椅子とテーブル。
舞台中央上手寄りにテーブルクロスが掛けられたテーブル。大切な客を迎えるため花が飾られている。
椅子が数脚。
舞台下手は二段ほど上がって外に通じるドア。奥は厨房、上手に事務所のある二階へと続く階段。

カウンターのスツールに腰掛けて、春雨次郎が携帯電話をかけている。

次　郎「・・・ああ、もしもし。こちらはレストラン『かもめ』ですけどね。・・・ええ、二丁目の『かもめ』。クーラーがね、・・・は？・・・クーラーですよクーラー。調子悪くてね、動かないんですよ。え？・・・そう、スイッチ入れても消してもね、ウンともスンとも動かないの。・・・え？・・・そりゃスイッチ消したら動かないのは分かってま

すよ、だからね、入れても動かないの。・・・ええ。・・・それでね、大至急修理に来て貰いたいんですよ。・・・え？・・・日曜だってのも分かってますよ、・・・あのね、今日はね、大事なお客さんが来るからね、クーラー動かないと困るのね。・・・だってあなた、今日は今年一番の夏日ですよ。気象庁の予報聞いて御覧なさいよ、記録的な猛暑だってちゃんと言ってるから。・・・ええ、お願いしますよ。ええ、それじゃ。（電話を切る）」

春雨小夜子、奥から現れる。

小夜子「電話した、電気屋さん？」
次　郎「うん、今した」
小夜子「（奥を伺い小声で）あなた」
次　郎「うん？」
小夜子「伸ちゃんのフィアンセ」
次　郎「自称フィアンセだよ。今日初めて向こうの親と会うんだから」
小夜子「相当よ、あれ」
次　郎「なにが？」

小夜子「あたし、別に悪口言いたくないけどさ。苦労するわよ、伸ちゃん」

次　郎「まぁ、お嬢さんだからね、ちょっと世間知らずな所もあるだろうけど・・・」

小夜子「ちょっとどころじゃ無いって」

次　郎「・・・そんなに？」

小夜子「（頷く）」

次　郎「・・・かなり？」

小夜子「（頷く）」

次　郎「・・・まぁ、人ンちの事だから」

小夜子「良かったわね、あなた、あたしが奥さんで。感謝なさい（玄関へ向かう）」

次　郎「どこ行くの？」

小夜子「お買い物をおおせつかりましたの、お嬢様に。アア、死にそう、ここ」

小夜子、出て行く。

木島伸一が奥から現れる。

伸　一「どうしよう、次郎ちゃん」

次　郎「うん？」
伸　一「千恵子が料理作るって聞かないんだ」
次　郎「いいじゃないの」
伸　一「無理だよ、千恵子には」
次　郎「自分の親父に食わせるんだから」
伸　一「うちはレストランだよ！」
次　郎「じゃあ伸ちゃん作れば？」
伸　一「出来る訳ないでしょ！僕去年まで区役所の戸籍係りだったんだから・・・出前取ろう」
次　郎「レストランが出前取ってどうすんの。落ち着けよ、伸ちゃん」
伸　一「次郎ちゃんは、千恵子の料理、食べた事無いから」
次　郎「・・・そんなに？」
伸　一「刺身にマヨネーズつけて食わせるんだよ」
次　郎「・・・ちょっと、そういう話勘弁。おれ今日二日酔いなんだ」
千恵子「（奥から現れて）もうダメ、これ以上はダメ」
伸　一「（心配になって）どうしたの？」
千恵子「厨房はもう地獄の暑さ、塩からのてんぷらあげてたんだけど、ちょっと休憩」

伸　一「（次郎を見る）」
次　郎「・・・うまそうだ、そりゃ」
千恵子「クーラー、まだ直らない？」
次　郎「もう直ぐ来るよ、電気屋。今、電話したから」
千恵子「パパ、暑いのだけは苦手なの。このクーラー、もう買い替えた方がいいんじゃない？」
伸　一「そうなんだけど、今はうちも苦しいから・・・」
千恵子「大丈夫よ、パパがきっと応援してくれるから」
伸　一「（千恵子に）だけど、あんまりお父さんを当てにするのも、なんだかね・・・僕はお金目当てで君と結婚するみたいで、どうも、なんだか・・・」
千恵子「平気。伸ちゃんがそういう人じゃないって事は、あたしが一番良く分かってますから。さて、もういっちょ頑張るか。パパ、あたしの手料理食べたらびっくりするわよ。家でも作ったこと無いんだから」
次　郎「そりゃ楽しみだね」
千恵子「（伸一に）心配？」
伸　一「・・・ちょっと」
千恵子「大丈夫よ、パパ、あたしには甘いんだから。（上手奥へ退場）」

伸一「・・・塩からのてんぷら食べたら、どうかなァ・・・」
次郎「おい、気をつけろよ伸ちゃん」
伸一「なにを？」
次郎「なにをって、お金目当ての結婚だとか、犯罪一歩手前の年齢差だとか、そんな事は言うなってぇの」
伸一「だって、・・・ほんとにそんな気がするんだもん」
次郎「だったら尚更だよ。もう一息じゃないか」
伸一「だけどやっぱりどうも、なんか、釈然としないんだよねぇ」
次郎「ああヤダヤダ、もと文学青年はこれだからねェ。釈然なんて言葉、今時日常会話じゃ使わないよ。そんなことばっかり言ってるから、女房に逃げられたんじゃないの？」
伸一「小春はそんな事気にしなかったよ。まァ、もともと難しそうな言葉は全部気にしない女だったけど」
次郎「伸ちゃん、言っとくけどね、結婚は愛情じゃないよ。最優先に考えるべきは安定なんだよ。特に今の伸ちゃんはね」
伸一「分かってるよ」
次郎「それに彼女の事だって、まんざら嫌いじゃないんだろ？」
伸一「そりゃァ、幾ら僕でも嫌いな相手とは結婚しないよ」
次郎「だったら何の問題があんの？」
伸一「つまり、彼女の僕に対する愛情なんだなァ。それが僕を苦

しめるんだな」

次　郎「・・・つまり、ノロケてんの？」

伸　一「つまり、彼女は純粋に僕を愛してくれていて、だけど僕の心の中には、何か、得体の知れない、不純なものが在るように思えてしょうがないんだよ」

次郎「彼女は純粋に資産家の娘で、伸ちゃんにはちょっと大きな借金が在るだけ。他に難しいことは一切なし。とにかくシケタ面ァやめてくれ。それでなくても花嫁の父ってのは敏感なんだから。（腕時計を見ながら外を伺う）畜生、電気屋の野郎、何やってんだ？」

伸　一「・・・ねぇ次郎ちゃん」

次　郎「ア？」

伸　一「瞳ちゃんのことどうすんの？」

次　郎「な、何だよ、藪から棒に」

伸　一「悩んでるよ、彼女。昨日も電話してきたんだ」

次　郎「大丈夫、ちゃんとケリはつけるって。（舌打ちして）おい、電気屋、みんな干物になっちまうぞ」

小春、スーツケースを引き摺ってドアから登場。

男性二人とも、声も無く呆然。

ややあってー

小春「・・・どうも、お久し振り」

伸一「・・・・やぁ」

次郎「・・・小春ちゃん、どうしたの？」

小春「見れば分かるじゃん、帰って来たのよ」

次郎「だよね、じゃないかなって思ったんだ」

伸一「・・・帰って来た？帰って来たって、もしかして、家に？」

小春「（店を見回して）みたいね。（ドンドンと入って来て）凄いわね、ここ。我慢大会でもやってんの？外の方が涼しいじゃない」

次郎「クーラーがね、調子悪いんだ」

小春「ついにこいつにも寿命が来たか」

次郎「今、電気屋呼んでんだけどね」

伸一「・・・ねぇ小春！」

小春、伸一を見る。

伸一「（ちょっとドギマギして）ど、どういう事、帰って来たってどういう事？」

小　春「今説明しなきゃダメ？ちょっと着替えたいんだけど」
伸　一「だって、だって、あれじゃないか、だって僕達、ちゃんとアレしたじゃないか、り、離婚したじゃないか？ねぇ、ねぇ次郎ちゃん！」
次　郎「まぁまぁ、伸ちゃん落ち着いて」
伸　一「だって、困るじゃないか、次郎ちゃん、だって、いきなりそんな、帰って来ただなんて、それはあんまり勝手じゃないか？」
次　郎「俺に言うなよ、俺が困るじゃないか」
小　春「そうよ、次郎ちゃんに言う事ないわよ。言いたい事があんなら、あたしに言えば？」
伸　一「僕、あ、アレするんだよ、アレ・・・」
小　春「アレ？」
伸　一「・・・（言葉に詰まって）次郎ちゃん言ってよ」
次　郎「だから俺にふるなって」
小　春「何なのよ、アレって」
次　郎「・・・再婚」
小　春「再婚？」
次　郎「再婚するの、伸ちゃん。そんで今そのフィアンセが厨房に居て、塩からのてんぷらあげてんだ」

小　春「・・・あら、そう」
伸　一「そう・・・」
小　春「ほんの一年で大忙しね」
伸　一「・・・」
小　春「だけど、大胆な発想するわね、あなたのフィアンセ」
伸　一「え？」
小　春「塩からてんぷらにする人、初めて聞いた」
伸　一「お、お父さんもね、じきにいらっしゃるんだ。きょ、今日は取り込んでるんだよ、うちは」
小　春「じゃあいいわ。次郎ちゃんに頼もう。今日一日、伸ちゃんになって」

短い間。

次　郎「・・・ごめん、ちょっと、二日酔いで頭良く回んないんだけど、今の、どういう意味？」
小　春「もう直ぐここにね、加藤幸一って言う人が来るんだけどさ、あたしその人にプロポーズされてんの。ところがそいつが物凄いマザコンでさ、あたし適当にあしらってたんだけど、あんまりしつこいもんだから、嘘ついちゃったの。あたし

は、もう一度伸ちゃんと寄りを戻すつもりだからって。だから適当に話し合わせといて。（伸一に）どう、あたしの方も結構取り込んでんでしょ？」

伸　一「よ、よそでやってくれよ次郎ちゃん！そんなの、うちじゃ困るよ！」

次　郎「だから俺はね・・・・」

小　春「だってここに来てって、あたしもう言っちゃったんだもん。

千恵子「（奥から走って来て）伸ちゃん、大変！・・・・あらお客様？」

次　郎「・・・そう、僕の幼馴染み」

小春と伸一、次郎を見る。

次　郎「昨日田舎から出て来てね、今日手伝いに来てもらったの。（すがるように小春を見て）・・・ね？」

千恵子「そうなの、宜しく」

小　春「（丁寧にお辞儀しながら）どうもはずめますて、若奥様」

千恵子「やだわ、若奥様だって」

伸　一「た、大変って、なんかあったの？」

千恵子「塩からのてんぷら、燃え出しちゃったの」

伸　一「・・・燃え出したって、あのう、火がついて燃えてるって事？」

千恵子「早くしないと塩からの丸焼きになっちゃうんだけど、どうしたらいい？」

男二人、顔を見合わせるやいなや、アタフタと奥へ駆け込む。続いて千恵子も退場。

小　春「チッ、ただのバカじゃん（憤然と椅子に座る）」

ドアを開けて鈴木健太郎が現れる。
室内の温度に圧倒されてしばらく声もない。

小　春「（気付いて）あ、どうも、ご苦労さま」

健太郎「は？・・・あ、お邪魔致します」

小　春「それよ、問題のクーラー」

健太郎「は？・・・ホウ・・・」

小　春「どう？」

健太郎「・・・なかなか、そのう、旧いもののようで・・・」

小　春「先代のお父さんの頃から使ってんのよ。今まで動いてたの

が不思議なくらいね」

健太郎「ホウ・・・」

小　春「ま、お父さんが残してくれたのは、このレストランとそのクーラーと、ちょっとばかしの借金ってわけ。アハハ」

健太郎「はぁ・・・」

小　春「で？」

健太郎「え？」

小　春「どう？」

健太郎「・・・と、おっしゃいますと？」

小　春「直りそう？」

健太郎「（クーラーを睨んで）はぁ・・・いや、やはり、私一人では、ちょっと・・・」

小　春「そんなにひどい？」

健太郎「と申しますより、そのう、私にはこの方面の知識がございませんものですから」

小　春「そんなに旧いんだ」

健太郎「はぁ、まぁ旧い事は旧いでしょうな」

小　春「旧いだけじゃ役に立たないものね」

健太郎「あ、いや、どうも、お恥ずかしい・・・（ハンカチで汗を拭う）」

小　春「あらヤダ、何もおじちゃんのこと言ったわけじゃないわよ。誰にでも・・・アレがあるんだから気にする事無いって」
健太郎「は？」
小　春「アハハ、何だっけ？アレ、ほら、猿みたいな言葉」
健太郎「猿、みたいな言葉・・・？」
小　春「ほらアレよ、アレ・・・そう！『得手不得手』だ！」
健太郎「ああ、『得手不得手』」
小　春「そう、誰にだってソレがあるんだから、気にすること無いって言いたかったの、アハハ」
健太郎「『得手不得手』ですか・・・いや、私は実際、今日みたいな事は、実にどうも、不得手な人間でございまして・・・」
小　春「うんうん」
健太郎「出来ましたら、今日はご遠慮したかった次第で・・・（慌てて）いや、是非とも、そのう、お気を悪くしないで頂きたいんですが・・・」
小　春「ぜぇんぜん、平気平気」
健太郎「ここに参ります間も、そのう、胃がチクチクと、こう・・・」
小　春「痛かった？」
健太郎「今も、こう、時折チクチクと、そのう、なんともお恥ずか

しい次第で・・・」

小　春「大丈夫？胃ぐすり持って来ようか？」

健太郎「いえ、もう、お構い無く、すぐ、すぐ治りますから、ええ、どうぞ、そのままで・・・（苦痛に顔が歪む）」

小　春「・・・ちょっと座ったら？」

健太郎「はい、それではちょっと、お言葉に甘えまして・・・」

小　春「よっぽど来たくなかったのね？」

健太郎「いえいえ、そういう訳では決して、それは是非、誤解の無いように一つ・・・ただ、そのう・・・まだまだ先の事だと、・・・そのう、私は、まだ子供だと思っておったものですから」

小　春「うん？（健太郎を見て）・・・そりゃ、ちょっと、考えが甘かったわね」

健太郎「はぁ・・・しかし、私には、少し、早過ぎるような気が致しまして・・・」

小　春「そう？・・・充分じゃないの？年齢から言っても」

健太郎「まぁ、世間さまには、それは、適齢期に見えるのかも知れませんが・・・」

小　春「適齢期？」

健太郎「はぁ」

小　春「・・・それ、こういう場合に使う？」
健太郎「は？」
小　春「『適齢期』って言葉」
健太郎「普通は、・・・多分・・・」
小　春「ふぅん・・・」
健太郎「それで、そのう、・・・木島伸一さんは？」
小　春「奥に居るけど」
健太郎「・・・お忙しいですか、今？」
小　春「ちょっと、取り込んでるみたい。・・・会ってくの？」
健太郎「はぁ」
小　春「別にいいよ、会ってかなくても。あたしから言っとくよ」
健太郎「・・・いや、しかし、せっかく出て参りましたから」
小　春「だけど、・・・会ってなに話すの？」
健太郎「・・・それを考えますと、胃が、こう、チクチクと・・・」
小　春「こんな言い方してごめんなさいね、だけど、誰か代わりの人に早く来て貰った方が、うちとしても助かるんだけどな」
健太郎「・・・代わり、とおっしゃいますと、そのう・・・誰でしょうか？」
小　春「さぁ、そりゃあたしも、名前までは分かんないけど」
健太郎「妻も先年亡くなりまして、そのう、他に適当な人物という

のは・・・」

小　春「・・・仕事が出来る人だったら、誰でもいいじゃない？」

健太郎「・・・うちの会社の者で、ですか？」

小　春「そう」

健太郎「しかし、それではやはり、親として余りに無責任な気がいたしますが・・・」

小　春「（しばらく考えて）親として？」

健太郎「はぁ」

小　春「息子さんには任せらんないってこと？」

健太郎「いえ、息子はおりませんが・・・」

小　春「じゃ、娘さん？」

健太郎「はぁ」

小　春「（しばらく遠くを見詰めて）まっ、あんまり難しく考えないで、何もお宅と一生付き合ってく訳じゃなし」

健太郎「（しばらくあって）ええっ？」

小　春「え？」

健太郎「き、木島さんは、そういう、そのう、お考えで？」

小　春「・・・だと思うけど」

健太郎「しかし、それでは、あまりに娘が・・・」

小　春「娘さんでなくてもいいんだけどなぁ、うちは」

健太郎「む、娘で無くてもいいというのは、それは一体どういう・・・」
小　春「男の人でもいいんだけど」
健太郎「（のけぞる）お、男でも？」
小　春「大丈夫？どっか具合悪いんじゃない？」
健太郎「・・・（息を整えながら）よ、よろしかったら、水を一杯・・・・」
小　春「ここ、暑いからねぇ、二階の事務所でちょっと休んでけば？あっちのほうが風通しもいいし、ね、そうしなよ」
健太郎「（荒い息遣い）はぁ、その前に、ちょっと、お水を一杯・・・」
小　春「ちょっと待ってて。お水持って来たら案内するから」

小春、厨房へと走る。
ドアを開けて、加藤喜久江と、息子の幸一が現れる。

喜久江「御免ください」

健太郎、息を整えながら、ぎこちなく会釈する。

喜久江「加藤でございます」

健太郎と喜久江、しばらく見詰め合う。
ややあって、健太郎、ふたたび会釈する。

喜久江「・・・こちら、暖房が、入っておりますの？」
健太郎「いや、そのう、クーラーが、動かんそうです・・・（頭を下げる）」
喜久江「失礼ですけど、木島さんのお父様で？」
健太郎「はぁ、いや、それがどうも、・・・いや、娘はその積もりらしいですが、し、しかし、私としては、どうも・・・」
喜久江「（顔を輝かせて）え？それではお父様としては、反対でいらっしゃるのね？」
健太郎「いや、まぁ、それは、当人の意思を尊重したいと、私も思いますが、そのう・・・」
幸　一「お父さん！」
健太郎「は？・・・」
幸　一「お父さん！ください！娘さん！僕に！」
健太郎「（驚愕してしばらく幸一を見詰め）・・・ええっ？」
喜久江「あらまぁ、コウちゃん、ちゃんと、ほら、順序立ててお話

しないと、お父様だって吃驚(びっくり)なさいますよ。（健太郎に）ねぇ、まぁ本当に、申し訳ございません」

健太郎「ど、どちら様でしょうか？」

喜久江「加藤でございますが」

健太郎「か、加藤さん・・・そのう、む、娘とは一体、どういうご関係で？」

幸　一「ぼ、僕は、僕は絶対に、絶対なのです！幸せです！なります！させます！け、結婚！ください！娘さん！僕に！お父さん！」

幸一、健太郎を押し倒さんばかりに迫る。

健太郎、その迫力にただ目を丸くして幸一を見詰めるばかり。

二人しばらく無言で見詰め合うが、急に幸一は喜久江の胸に飛び込む。

幸　一「ママ！」

喜久江「だから、順序立ててお話しなさいって言ってるのに、もう、コウちゃんのお馬鹿さん。（笑う）」

健太郎「（厨房の方に叫ぶ）み、水を！すみません、み、水をいっ

ぱぁぁい！」

小春、コップを持って駆け込んで来る。

小　春「はいはい、そんなに怒鳴ったら血圧上がるわよ。（加藤親子に気付き）アッ？」

幸　一「こ、小春さん！」

小春、そのまま回れ右して、奥へ駆け込む。

健太郎「み、水！水ッ！」

幸　一「こ、小春さん！ど、どうして逃げるのです？ママ、どうして逃げるのです？」

喜久江「落ち着きなさい、コウちゃん、ママがついてるから大丈夫よ」

小春、エプロンをした次郎を引きずって来る。

次　郎「今ダメだって、手が放せないんだから！」

小　春「（次郎を加藤親子の方に押し出して）任せた」

次　郎「え？」
小　春「（健太郎に）さぁ二階に行きましょうね」
健太郎「水を、お願いしますから、水を一杯」
小　春「持ってく持ってく、後で持ってくから、とりあえず二階で休みましょ、ね、行きましょ、さぁ行きましょ行きましょ」

小春、健太郎を引き摺って階段を登る。
三人、小春達を見送ってー
気まずい間。

喜久江「木島さんでいらっしゃいますね？」
次　郎「は？」
喜久江「加藤でございます」
次　郎「は？加藤さん？・・・（思い当たって）ああ！加藤さん？ああ！・・・（幸一に）ええっとあのう・・・マザコンさん？」
幸　一「（喜久江の後ろに隠れて）ママ・・・」
喜久江「大丈夫よ、ママがついてますからね、堂々としてらっしゃい」
次　郎「（上手へ寄りながらしきりに頷く）ああ、ああ、ああ、あ

あ、（階段の下から泣きそうな声で）ねぇちょっと、小春ちゃん！」

喜久江「木島さん、私ども今日は、お話があって参りましたの」

次　郎「ええ、はぁ、まぁ、そのお話でしたら、また、次の機会という事で・・・」

喜久江「いいえ。お父様もお出でになってらっしゃる事ですし、今日ここではっきりとさせて頂きます」

次　郎「・・・お父様？」

喜久江「木島さん、こう言っては失礼かも知れませんけれど、お父様は反対でいらっしゃいますのよ」

幸　一「そ、そうです。いま、はっきりと聞いたのです、僕たち」

次　郎「・・・ええっと、それは、どちらのお父様でしょ？」

喜久江「・・・今、お二階へ行かれたお父様です」

次　郎「（上手の方を見てしばらく考え）・・・あの方は、どなたでしょ？」

奥から伸一、同じくエプロンをして出てくる。

伸　一「困るよ、次郎ちゃん、早くしてよ、時間無いんだから・・・あれ、お客様？」

次郎「・・・今行くから、奥で待ってて、次郎ちゃん」
伸一「・・・うん？」
次郎「（一語一語はっきりと）今行くから、奥で待ってて、次郎ちゃん」
伸一「・・・何言ってんの、次郎ちゃん？」
次郎「（伸一を睨み、加藤親子を紹介する）・・・加藤さん」
伸一「・・・うん？」
次郎「小春の、知り合いの、加藤さん」
伸一「小春の知り合い？（喜久江に人なつっこく）前にお会いしたことありましたっけ？」
次郎「無いでしょう、君は！」
伸一「どうしてよ、小春の知り合いだったら、前に会ったことあるかも知れないじゃない？」
次郎「無いの！だって、君の知らないところの、小春の知り合いなんだから！」
伸一「何なんだよさっきから小春小春って！どうして小春の事を呼び捨てにするんだよ！」
次郎「（困って）だって、だって、小春は、僕の別れた女房じゃないかァ！」
伸一「（驚愕）・・・ああ？」

ドアを開けて小夜子が帰って来る。

小夜子「ただいま。あら・・・（加藤親子に会釈する）」

伸　一「今、何つった？」

次　郎「（素早く）何にも言ってない」

伸　一「言ったじゃないか、今変なこと！」

次　郎「絶対何にも言ってない！そりゃあ、君の空耳だ」

小夜子「何喧嘩してるの二人で？」

喜久江「木島さん」

次郎と伸一、振り返る。

喜久江「ちょっと座らせて頂いていいかしら？」

伸　一「どうぞ」

次　郎「（同時に）ダメです」

伸一と小夜子、次郎を見る。

次　郎「今日はそのう、た、立て込んでおりますもので、申し訳あ

りません」
小夜子「（次郎に）ちょっと、あなた」
次　郎「（小夜子に）あのうすみませんが、むこうで手が足りないようなので、お、お願いします」
小夜子「・・・なに？」
次　郎「あのう、りょ、料理の方を、お願いしたいんですけれど・・・（小夜子の視線に言葉が消えて行く）」
小夜子「（冷ややかに次郎を見て）あなた、それ、何の真似？」

短いが、気まずい沈黙。

次　郎「・・・な、何が、でしょうか・・・」

小夜子、加藤親子を見る。
やがて彼女の顔に浮かぶ不気味な微笑み。
次郎、たじろぐ。

小夜子「・・・結構よ。あなたにも何かお考えがあるんでしょうから。（嵐を秘めた猫撫で声で）後でゆっくりとお話しましょうね、あなた」

小夜子、たっぷりと余韻を残して、奥へ退場。

喜久江「木島さん」

次郎と伸一、振り返る。
次郎は半泣き状態である。

喜久江「（セットしてあるテーブルを指差し）そこへ座ってもよろしいかしら？」

伸　一「どうぞ」

次　郎「　（同時に不必要な大声で）ダメです」

伸一、次郎を一瞬睨み付け、物凄い勢いで捲し立てる。

伸　一「どうぞ、どうぞ、どうぞ、どうぞ！この男が何と言おうと一切無視してお座りください！（勝ち誇ったように次郎を見据える）」

喜久江　「では、御免遊ばせ。さ、コウちゃん、いらっしゃい」

幸　一「（囁く）この人達、変です、ママ」

喜久江「（囁く）何か秘密があるのよ、きっと。（普通に）ま、小春さんとお父様が降りていらっしゃるまで、待たせて頂きましょ」

次　郎「（伸一を隅に引っ張る）」

伸　一「なんだよ」

次　郎「・・・いいんだな？」

伸　一「なにが？」

次　郎「俺はもう、知らねぇからな」

伸　一「（ちょっと不安になって）な、何がよ」

幸　一「暑いのです、ママ」

喜久江「もうちょっとの辛抱よ、ね、いい子だから。コウちゃん、小春さんの事を思えば、暑いのくらい我慢出来るでしょ」

幸　一「・・・はい、我慢します」

伸一、加藤親子を見、次郎を見て、もう一度加藤親子に視線を移して愕然となり、次郎をさらに隅へと引っ張る。

伸　一「・・・あの人達、そう？」

次　郎「（不貞腐れている）なにが？」

伸　一「さっき、小春が言ってた、マザコンって、あれ？」
次　郎「（依然不貞腐れてやけくそ気味に）だったら、どうなの？」
伸　一「・・・（泣きそうになって）帰って貰おう」
次　郎「自分で言えよ」
伸　一「僕たち親友だったよね、ずっとずぅっと親友だったよね！」
次　郎「さっきまではな」
伸　一「さっきまでって？」
次　郎「さっき俺の女房が、般若みたいな顔して笑うまではな！言われもないことで、うちは家庭崩壊の危機だよ！」
伸　一「後で謝る。小夜ちゃんには僕が後で謝っとく」
喜久江「木島さん」

次郎と伸一、振り返るが、咄嗟に伸一が次郎を前に押し出す。

喜久江「お父様、お加減が悪そうでしたけれど？」
次　郎「・・・（一寸考えて）はぁ、そうですか・・・」

喜久江と次郎、見詰め合う。

伸　一「（次郎を隅に引っ張り囁く）誰、お父様って？」
次　郎「（囁く）さあ」
喜久江「大丈夫かしら、小春さんも降りていらっしゃらないけど」
次　郎「・・・それじゃちょっと、様子を見てきましょうか」
伸　一「（慌てて次郎を引き止めて）どこ行くの？」
次　郎「二階だよ」
伸　一「二階に居るの？小春（喜久江を意識して）さん・・・」
次　郎「それと、誰かのお父様がな・・・」

喜久江と幸一、次郎の言葉に驚いて顔を見合わせる。
同時に伸一と次郎、ビクッと動きを止める。
お互い顔を見合わせて青ざめる。

伸　一「・・・（恐る恐る）何考えたの？」
次　郎「・・・伸ちゃんは？」

短い間。
二人、二階を見上げる。

次　郎「・・・まさか、な・・・」

伸　一「・・・まさかでしょう、それは・・・」

重苦しい沈黙。

二人、二階を見上げたまま。

伸　一「・・・何の話してると思う、あの二人・・・」

次　郎「具合悪いまんま寝込んでくれてたら、具合いいんだけどな・・・」

喜久江「まっ・・・（軽蔑の視線で次郎を見る）」

次　郎「（慌てて）いや、寝込まないとお父さん発作を起こすんですよ。（伸一に）なっ！」

伸　一「そ、そう！あれは見てる方が辛いからねぇ・・・」

喜久江「まぁ、どこがお悪いんですの？」

次　郎「・・・（伸一に）どこだっけ？」

伸　一「・・・どっかだよねぇ、確か」

喜久江「ンまぁ・・・（更に色合いをました蔑視で二人を睨む）」

幸　一「小春さん、可哀相です、こんな人達に騙されて・・・」

伸　一「だ、騙されてって事はないだろう、君」

喜久江「（伸一に）お宅様は？」

伸　一「（ちょっとドギマギして）か、彼の友人ですけど・・・」

喜久江「木島さんの？」
次　郎「ええ、まァ・・・」
喜久江「今日は何かのご用事で？」
伸　一「・・・ええ、・・・だって、だってほら、今日は二人の新しい出発の日だから！ねっ、伸ちゃん」
次　郎「（伸一の顔をマジマジと見る）」
喜久江「その事でちょっと木島さんにお伺いしたいことがあるんですの」
次　郎「（用心深く）なんでしょうか？」
喜久江「まァ他人（ひと）様のご家庭に口を挟みますのもなんなんですけど、小春さんとは正式に離婚なさってらっしゃいますわよね」
次　郎「・・・ええ、まァ・・・」
喜久江「それでまた再婚なさろうと言う・・・」
次　郎「はぁ・・・」
千恵子「（奥で呼ぶ）伸ちゃぁん！（甘えた声で）木島伸一さァン！」
伸　一「（つい答えて）なに？（奥へ退場）」
喜久江「（驚いて伸一を見送る）」
伸　一「（慌てて戻り）呼んでるみたいだけど、伸ちゃん」
喜久江「あら、ほんとに今日はお取り込みのようでいらっしゃいま

すのね」

次　郎「そうなんです、ええ」

喜久江「では、私の方も手短に要件だけ申し上げます。小春さんとのこと、もう一度考え直して頂けませんかしら。いえ、それは確かにお宅さまお二人の事で、私共が口を挟む話ではありませんけれど。でも、これは木島さん、差し出がましいようですが、あなたの事を考えて申し上げますんですのよ。一度壊れた夫婦の仲が、一年やそこらでまた元通りになるなんて、あなただって本当に信じていらっしゃる訳ではございませんでしょう？」

伸　一「いや、それはそうとは言い切れないんじゃないですか？夫婦だっていろんな夫婦が居ますし、中には、冷却期間を置いて、それでうまくいく夫婦もいるんじゃないでしょうか？」

喜久江「申し訳ございませんけれど、私は木島さんのお考えをお伺いしているんです」

伸　一「し、伸ちゃんだって、やっぱりそう思うだろ？」

次　郎「はぁ、私はですね、あのう、その件につきましてはですね、そのう、何と申しましょうかねェ・・・」

千恵子「（飛び出して来て）ねぇ、フライパンから煙り出てるけど

あのままでいいの？」

伸　一「駄目だよ、駄目！火を止めといて！」

千恵子「（スネて）だって、ほったらかしてくんだもの！どうせ結婚したってあたしの事ほったらかしにするんでしょうね！」

喜久江「結婚？」

次　郎「ええ、この二人結婚するんです。な！」

伸　一「（言葉尻が心なしか力なく）ええ、そう、僕たち、結婚するんです」

千恵子「なんか嫌そうじゃない？」

次　郎「そんな事あるもんか、そんな事ないよな、伸ちゃん！」

喜久江「えっ？」

次　郎「えっ？・・・いや、だからそのう、なぁ、次郎ちゃん・・・・」

千恵子「えっ？」

次　郎「（泣きそうになって）えっ？・・・だから、だからね・・・・フライパン！（奥へ駆け込む）」

千恵子「（次郎を見送って）どうかしたの？次郎ちゃん」

伸　一「（喜久江の目を気にしながら）えっ、いや、僕は何ともないよ」

千恵子「だから、次郎ちゃん」

伸　一「・・・はい」
千恵子「はぁ？・・・（伸一の額に手を当てて）大丈夫？」
幸　一「（突然立ち上がり）ママ！・・・暑い！」
喜久江「いい子だから、もうちょっと我慢しましょうね」
千恵子「（伸一に小声で）どなた？」
伸　一「ああ、うん、ええっと、あのう・・・」
喜久江「加藤でございます」
伸　一「（千恵子に）加藤さん」
千恵子「鈴木です。木島が何時もお世話になっております」
喜久江「あのう、失礼ですけれど、お宅は木島さんの・・・」
千恵子「・・・ええ、ですから、フィアンセです」
喜久江と幸一「ええっ？」
伸　一「（ワンテンポずれて）ええっ？」
千恵子「・・・どうしてあなたが驚くの？」
喜久江「ど、どういう事でしょうか？あなたが木島さんとご結婚なさると言う事でしょうか？」
千恵子「ええ、それが何か・・・」
喜久江「で、でも、木島さんは小春さんとご結婚なさるので御座いましょう？」
千恵子「小春さん？（伸一に）誰よ、小春さんて？」

喜久江「えっ、違うんで御座いますの？違いますのね？」
千恵子「誰なの、小春さんて？」
幸　一「（喜び）ママ！」
喜久江「（喜び）コウちゃん！」
伸　一「（奥に）ねぇ、ちょっとこっち来て・・・」

健太郎、ヨロヨロと階段を降りて来る。

千恵子「（驚いて）パパ！」
健太郎「ち、千恵子、み、水を、水を一杯くれ・・・」
千恵子「パパ、聞いて、伸ちゃんに他の女が居たの！」
健太郎「うん、そうか々々、千恵子、先に水を一杯くれ・・・」
千恵子「それでその人と、結婚の話までしてるらしいの！」
健太郎「そこの青年は、お前を嫁にくれと言うとった。とにかく水を一杯くれ・・・」
喜久江「・・・（千恵子に）あなた、小春さんの妹さん？」
伸　一「（奥に）ねぇっ、ちょっと早く来て！」
健太郎「わ、儂は水さえ飲めれば、何がどうなっても構やせん・・・（ヨロヨロと奥へ向かう）」
千恵子「あたし、悔しいーっ！」

厨房へ入りかけた健太郎、いきなり頭から水を浴びる。
次郎が健太郎を突き飛ばして転がり出る。
その後に、バケツを手にした般若のごとき小夜子が続く。

小夜子「さぁ、さっさと白状なさい！あなた、何を隠してるの！」
次　郎「何にも隠してない！誤解だ！」
喜久江「（次郎に駆け寄り）伺いましたよ、今はっきりと。あなた、こちらの女性とご結婚なさるそうですわね」
次　郎「・・・えっ？」
喜久江「小春さんとは、やっぱり遊びでしたのね。ねぇ、そうで御座いましょ！」
次　郎「え、ええっ？」
喜久江「（呆然と床に腰を下ろしている健太郎に駆け寄り）お父様、あの方は妹さんとご結婚なさりたいそうですの。ですから、お姉さまとうちの幸一とのお付き合いには、何の問題も御座いませんのよ」
千恵子「・・・何言ってんの、このおばさん？」
小夜子「・・・（次郎に）そうなの。あたしからもおめでとうを言

わせて頂戴ね、あなた。それから、さようならも」
喜久江「（最早抑え難きオバサンの好奇心を発揮して）それで、貴女様は一体どういうご関係で？」
小夜子「こちら様の妻でございましたわ。つい、さっきまで」
喜久江「ンまァ、乱れてらっしゃるのね、木島さん」
千恵子「・・・木島さん？」
小夜子「春雨です」
喜久江「・・・は？」
小夜子「春雨次郎です。この馬鹿は」
喜久江「春雨・・・次郎？・・・次郎さんは・・・？（伸一を見る）」
千恵子「次郎さん？（伸一を見る）」
伸　一「つまり、さっきのは全部、次郎ちゃんの話さ」
次　郎「・・・鬼、悪魔！・・・（泣く）」
伸　一「みなさん、ご説明致します。少々の誤解を解けば他愛もない事なんです」
幸　一「（二階に）小春さぁん、降りて来て下さぁい！」
千恵子「小春さんって一体誰なの？」
伸　一「いや、そこから話をするのはあんまり感心しないな」
幸　一「（呼んでいる）小春さぁん！」

千恵子「いいからまず、その人のことをはっきりさせて！」
喜久江「あなたのお姉様でしょう？」
千恵子「（今までに無い迫力で）うっせぇババァ！・・・それで？」
伸　一「（すくみ上がって）そ、それでね、うん、それは、・・・ほら、さっき紹介したじゃないか、次郎ちゃんの幼馴染みさ」
千恵子「・・・（やっと腑に落ちて）ああ！」
伸　一「（ほっとして）ね、他愛もない話だろ？」
次　郎「そこで終わるなよ！」
千恵子「その人が次郎ちゃんと結婚するの？」
小夜子「（冷ややかに）あなたがこの馬鹿と結婚するんでしょ？」
千恵子「どうしてあたしがそんな馬鹿と結婚すんのよ」
次　郎「（泣きながら）ば、馬鹿々々言うなぁ・・・」
伸　一「ちょっと、結婚というのは置いとこう。結婚と言うのが出て来るから、話がややこしくなるんだ」
幸　一「こ、小春さんは僕と結婚するのです。ね、ママ？」
喜久江「ちょっと黙ってましょうね、いい子だから。あのお姉ちゃんはちょっと危ない人なのよ」
千恵子「で、あれは、何なの？」
伸　一「あれは加藤さん」

千恵子「なんでここにいるの？」
伸　一「なんか、話があったみたい」
千恵子「誰に？」
伸　一「・・・そこが分からない」
次　郎「説明になってねぇよ！いい！俺が話す。大体嘘をつくからこうなる。最初っから正直に話をすれば良かったんだ」
伸　一「まぁまぁ、落ち着いて・・・」
次　郎「落ち着いてられるかぁ！見ろ、一番困った状況にあるのは俺じゃないか！小夜子、聞いてくれ。全部つまらない茶番だったんだ。俺は誰とも結婚なんかしやしない！俺は無実なんだ！俺は利用されただけなんだァ！」
小夜子「誰に？」
次　郎「（伸一を指差して）あの鬼畜生にだ。小春という女性は、俺の幼馴染みなんかじゃない！」
千恵子「じゃあ何なの？」
次　郎「小春は、小春と言う女はあいつの、あいつの、・・・幼馴染みだ。（背を向けて独白）馬鹿馬鹿馬鹿！次郎ちゃんの弱虫！」
伸　一「（千恵子に）御免ね、だましたりして」
千恵子「どうしてそんな嘘なんかついたの？」

伸　一「これには深い訳があってね。まァ大した事じゃないんだけど・・・」
小夜子「（次郎に）言っとくけど、あなたの立場、ちっとも好転してないわよ」
次　郎「信じてくれ、俺はお前だけを愛してるんだ。本当なんだ」
小夜子「そういう歯の浮くような台詞が、余計に疑惑を膨らませるんだけど」
小　春「（フラフラと階段から降りてきながら次郎に）ダーリン、お話終わった？」

全員、唖然として一升瓶を抱えた小春を見る。

伸　一「・・・あれ、小春ちゃん、飲んでるの？」
小　春「（にっこりと）飲んでるの」
伸　一「（絶望）ああ・・・」
幸　一「こ、小春さん」
小　春「はい？」
幸　一「（次郎を指して）ほ、本当にその人と結婚するのですか？」
小　春「はい」
幸　一「で、でもその人は他の人と結婚していて、ここに愛人まで

居るのです！」

千恵子「（険悪に）愛人て誰の事よ？」

伸　一「ぼ、僕じゃないかな？」

幸　一「それであなたは本当に幸せなのですか？」

小　春「幸せでーす！ねーっ！（次郎の頬にキスをする）」

幸　一「ママー！（泣く）」

伸　一「おい、いい加減にしろよ！（千恵子の視線を気にして）ほら、一応幼馴染みだから・・・」

小　春「（次郎に寄り添って加藤親子に）あたし達は結婚します！幸せになります！」

次郎、天を仰ぐ。

健太郎「（消え入りそうな声で）すみませんが・・・み、水を一杯・・・」

小　春「（一升瓶を差し出して）よしっ！グーっといけ！」

健太郎、一升瓶をラッパ飲みする。

小夜子、ツカツカとドアに向かう。

次　郎「さ、小夜子・・・」
小夜子「後で連絡するわ、弁護士から」
次　郎「待って、待って下さい！全部話します、何も彼もお話します！」
小　春「（次郎にベッタリくっついて）なんなのこの女、イヤな感じ！」
次　郎「小春ちゃん、もうやめよう、もう限界なんだ。このままでは僕の家庭は滅びてしまうんだ。こう見えてもうちはまだ新婚なんだ、新婚三ヶ月なんだ！」
小　春「あたしとの家庭があるじゃない！」
伸　一「駄目だよ、そうなったらもう小春は、手がつけらんないから」
次　郎「（小夜子に）僕は何にも悪いことなんかしてない。身にやましい事なんか一つも無い！はっきり言う、今こそはっきり言う！彼女は、この彼女はあいつの、あいつのッ・・・（伸一を指差して）」
伸　一「（すかさず）大学時代の後輩なんだ」
次　郎「（愕然として声が出ない）」
小　春「（陽気に）センパァーイ！」
伸　一「（千恵子に）御免ね、嘘ついてて・・・」

千恵子「どうしてそんなに色々と嘘ついたの？」
伸　一「これには色々と複雑な理由がね・・・」
小夜子「（次郎に）それで？」
次　郎「はっ？」
小夜子「だから？」
次　郎「だから、だから僕は、彼女とは、何の関係もないんだ・・・（語尾が次第に消えて行く）」
小夜子「・・・あなた、自分で自分が恥ずかしくない？」
次　郎「凄く馬鹿だなァって、思う」
小夜子「死んだ方がマシだって思ったら電話して。協力するから」

ドアを開けて瞳が現れる。
全員の視線が集まる。

瞳　「・・・し、伸一さん・・・」
伸　一「瞳ちゃん？」
瞳　「あ、あたし、来ちゃいました」
伸　一「どうしたの？」
瞳　「（ウウ、ウウ、と泣きながら）伸一さん、あたしおなかに赤ちゃんがいるんです・・・どうしたらいいのか、もう、

あたし分からなくなっちゃったんです！伸一さァん！」

瞳、伸一の胸に飛び込んで激しく泣く。

伸　一「（全員の視線を浴びて）・・・とに角皆さん、食事にしましょうか？」

幕が降りる。

2

二幕

前場と同じくレストラン「かもめ」のフロアー。
伸一と次郎があたふたと給仕をする中、全員がテーブルに着いて食事をしている。
健太郎はジャージ姿に着替えている。
しばらく無言の食事が続く。
ときおり瞳のウッウッと言う声と鼻をすする音が聞こえるが、伸一と次郎以外誰も反応しない。
雰囲気は一言で言って、非常に険悪である。

一段落ついて、伸一が次郎を隅に引っ張って行く。

伸　一「（以下、二人の会話は小声で）どうするつもり？」
次　郎「どうするって？」
伸　一「瞳ちゃんの事だよ」
次　郎「ああ、瞳ちゃんね」
伸　一「困るよ、このままだと。僕、皆に疑われちゃってるんだよ」
次　郎「よく言うよ。その前に困ってるのは俺のほうだろ？」
伸　一「だって、瞳ちゃんの事は僕には関係のない事でしょ？」
次　郎「それを言うなら、小春ちゃんの事だって俺には関係ない事でしょ？」
伸　一「頼むから次郎ちゃんから説明してよ、皆に」
次　郎「何を？」
伸　一「瞳ちゃんの事をだよ」
次　郎「なんて説明すんの？彼女は俺の愛人で、お腹の赤ん坊は俺の子ですって、そう言うの？」
伸　一「そうだよ」
次　郎「言える訳ないだろ、そんな事！」
伸　一「だって事実じゃないか」
次　郎「事実でも言える事と言えない事とがあんの！」

伸　一「そんな勝手だよ」
次　郎「（開き直って）ああ勝手だよ」
伸　一「種を蒔いたのは次郎ちゃんだろ？」
次　郎「うわぁ、イヤラしい言い方するねェ、種を蒔いただなんて、
　　このドスケベ！」
伸　一「そんな意味で言ったんじゃないもん！」
次　郎「種を蒔いたっていうのはそういう意味でしょうが」
伸　一「偶然だよ、よくそういう言い方するじゃないか、種を蒔い
　　たって。それがたまたま偶然に・・・」
次　郎「タマタマ！ああヤだ！人格疑っちゃうよ、まったくデリカ
　　シーの無い！」
伸　一「違うってば！そういう意味のたまたまじゃないんだもん！」
次　郎「そんな事はどうだっていいんだよ」
伸　一「そう、そうだよ」
次　郎「問題は、俺達は大変なピンチに見舞われているって事だ」
伸　一「そうそう」
次　郎「そしてこの問題は俺達の手で解決する以外に方法が無いっ
　　て事だ。待っていても誰も助けてはくれない」
伸　一「そうそう」
次　郎「で、どういう解決方法があるか。それを早急に考え出さな

くてはならない」

伸　一「うん、異議なし」

次　郎「まず、状況を確認してみよう。僕の妻である小夜子は、僕が彼女と離婚して、君の前の妻であるところの小春ちゃんと結婚したがっていると誤解している」

伸　一「うん」

次　郎「そして次に、君のフィアンセである千恵子ちゃんと前の妻である小春ちゃんは、瞳ちゃんのお腹に君の赤ん坊が居ると思い込んでいる」

伸　一「本当は、次郎ちゃんの子供であるにも関わらずにだ」

次　郎「この際その事はいいんだ」

伸　一「うん、悪かった」

次　郎「よく考えて見たら、解くべき誤解は、たったこの二つだけなんじゃないか！」

伸　一「本当だ、その二つだけだよ、なんだ簡単なんじゃない？」

次　郎「まず一つ目。これは本当に簡単だ。全てを正直に話せばいい」

伸　一「正直に話すって、どう話すの？」

次　郎「だから、小春ちゃんは伸ちゃんの前の奥さんで、俺とは何の関係も無いってこと」

伸　一「ちょ、ちょっと待ってよ」
次　郎「大丈夫だって。前の奥さんだって言ってみたところで伸ちゃんには寄りを戻そうなんて考えは無いんだから、正直に話せばきっと千恵子ちゃんも分かってくれるさ。ホント、初めっからこうすりゃ良かったんだよ」
伸　一「そりゃまァそうなんだけど・・・それじゃ小春はどうなるの？」
次　郎「悪いが小春ちゃんの事まで考えてられない。大丈夫さ。あのマザコンと結婚したくないんだったら、キッチリ相手にそう言えばいいんだよ。何もこんな小細工なんかする必要はなかったんだよ」
伸　一「うん、そりゃそうなんだろうけど・・・」
次　郎「そして二つ目。これがなかなか問題なんだが、なんとか切り抜ける方法が無い訳でもない・・・」
伸　一「どうするの？」
次　郎「（伸一の肩に手を置いて）ここは一つ、悪者になってくれ」
伸　一「えっ？・・・えっ？」
次　郎「申し訳ないが、ここはそれしか策が無い」
伸　一「何言ってんのよ、それで次郎ちゃんは切り抜けられるかも知れないけど、僕はどうなるのよ僕は？これだって正直に

打ち明けようよ！」

次郎「何言ってるんだ、俺を殺す気か？」

伸一「次郎ちゃん、そりゃ身勝手だよ。悪いのは自分なんだから責任とらなきゃ男じゃないよ！」

次郎「いいよ！男辞めるよ。オカマになるよ。それでもいいよ！」

伸一「卑怯者！」

次郎「どうぞ犬と呼んで頂戴」

伸一「いいよ、自分で言わないんだったら僕が言うから」

次郎「鬼！悪魔！それでも人間か！」

伸一「じゃどうしろって言うの？僕に瞳ちゃんと結婚しろって、そう言うの？」

次郎「（ハッと伸一を睨み付けて）おい！」

伸一「（たじろぐ）な、何よ・・・」

次郎「どうしてそんないい方法を早く言わなかったんだ！そうだ！その手があったじゃないか！」

伸一「・・・付き合い切れないよ、次郎ちゃんとは。とにかく全部正直に話しする以外ないんだからね、恨みっこなしだからね」

次郎「恨む、恨んでやる！俺は死ぬまで恨み続けてやる！」

伸一「そんな脅しは利かないよ。次郎ちゃんに根気が無いのは僕

が一番良く知ってるんだから。（全員に）皆さん、ちょっと聞いて下さい」

一同、一瞬顔を上げて伸一を見るが、再び食事に戻ってしまう。

伸　一「・・・次郎ちゃん、状況は思ったより悪いよ」
小　春「ねぇちょっと」
伸　一「えっ、何？」
小　春「（ワインの空瓶を振って）お酒」
伸　一「まだ飲むの？もうやめときなって・・・」
千恵子「あたしもお酒！」
次　郎「はいはいお酒ね。（伸一に）伸ちゃん、ここは逆らわない逆らわない」
伸　一「千恵ちゃん、話を聞いてほしいんだ。全部本当の事を話すから」

瞳がウウウと泣き出す。

次　郎「あああああ、いい子だから泣かないのよ。（伸一を見て）悪

いパパだね」

瞳と伸一、次郎を睨む。

次　郎「（伸一に空瓶を差し出して）伸ちゃん、お酒頼む」
伸　一「イヤだよ、僕が居なくなったらある事無い事言うつもりなんでしょう？」
小　春「お酒、早く！」
次　郎「ほらマスター、お酒！」
伸　一「イヤだ！」
健太郎「この味付けは年寄りにはちとアレですな・・・」
千恵子「（険悪に）アレって？」
健太郎「・・・水を頂けますかな？」
千恵子「アレって何よ、パパ」
喜久江「大胆な発想でございますわね、塩からのてんぷら」
千恵子「それはどうも。お口に合いまして？」
喜久江「私ども庶民にはちょっと理解しづろうございますわね」
幸　一「ママ、これはおいしくないのです」
喜久江「あらあらコウちゃん、ダメでしょ、せっかく御馳走になってるのに」

千恵子「大体あなた方はどうしてここにいらっしゃるんですか？」
喜久江「はい？」
千恵子「今日は内輪のパーティーなんですけど」
喜久江「まァ、それにしてはずいぶん険悪なお食事でございますこと」
小　春「まァまァ喧嘩しないで。ホラ早くお酒持って来なさいったら」
幸　一「僕が行きます」
伸　一「君が行くことないでしょ」
幸　一「だって小春さんが・・・」
伸　一「小春さん小春さんっていい加減にしなさいよ！小春は君の事なんか好きじゃないんだから。そんな事も分からないの？」

短い間。

幸　一「ママーっ（喜久江にすがって泣く）」
次　郎「伸ちゃん、今のはキツいよ」
小　春「そうよ、そんな言い方する事無いじゃない！」
幸　一「こ、小春さん・・・」

伸　一「な、なんだよ、それじゃ君はこのマザコンが好きなのか？」
小　春「そんな事あなたに関係無いでしょ？」
伸　一「それみろ、やっぱり好きじゃないんじゃないか。大体君がハッキリしないからいけないんだ。嫌いなら嫌いだってハッキリ言ってやればそれですむんだ。始めっからこんな小細工なんか必要なかったんだ。ねぇ、そうだよね次郎ちゃん！」
次　郎「いや俺にフラれてもなァ・・・」
小　春「それじゃァあなたの方もハッキリさせなさいよね」
伸　一「な、なにをハッキリさせろって言うの？」
小　春「何よ！人には偉そうな事言って、自分のやってる事はどうなのよ！」
伸　一「な、なにを、僕が何をしたって言うの？」
小　春「（瞳を指差して）そこで泣いてるかわいそうな女の子！一体どうするつもりなの？」
伸　一「だ、だから、それを今から説明しようとしてたんじゃないか。実を言うとその子はね・・・」
次　郎「（叫ぶ）あっ！クーラーが直った！」
全　員「ええっ!?」
次　郎「間違いない、今、背筋に冷たいものがスーッと来た」

短い間。

小夜子「・・・冷たい風なんか来ないわよ」

次　郎「（クーラーに近寄って行き）アレッ、おっかしいなァ、今確かにスーッとね・・・」

次郎、クーラーを蹴っとばす。

途端にクーラーの内部で爆発音がして白い煙がもうもうと吹き出してくる。

悲鳴や叫び声があがって騒然となる。

次　郎「うわっ、た、大変だ、暖房になった！」

全　員「えーっ!?」

伸　一「それクーラーだから暖房機能なんかないよ!?」

小夜子「早く止めなさいよ！」

次　郎「（ボタンを無茶苦茶に押しながら）止まらない、もうどうにも止まらないっ！」

幸　一「ママーっ、暑い！」

喜久江「本当にとんでもない所ね、このレストランは！」

千恵子「どうぞお引取りになって下さい、誰も止めませんから」
小夜子「あなた、早くなんとかしなさいよ！」
次　郎「電源だ、電源を抜こう！」
伸　一「それ、コードが壁に埋め込んであるんだよ」
次　郎「よおし、そんじゃ本体のコードを切ろう」
伸　一「ダメだよ、そんな事したらもう使えなくなっちゃうじゃない」
次　郎「もうすでに使えないでしょうコレは！」
健太郎「ここのコックさんはいらっしゃいますかな？」
伸　一「えっ、今日はお休みですが・・・」
健太郎「ううむ、道理で・・・この味で営業はちょっと、アレですからなァ・・・」
千恵子「なんなのよ、アレって？」
健太郎「すみませんが、水を一杯頂けませんかな？」
次　郎「切るよ、伸ちゃん、いいね、切っちゃうよ！」
伸　一「そうだ、こうしよう！」

伸一、隅に走っていってブレーカーを落とす。
電気が消える。

伸　一「ね、これで一件落着」
次　郎「・・・真っ暗だよ、伸ちゃん」
伸　一「うん・・・まァこれくらいはこの際仕方ないよ・・・」
次　郎「タダでさえ明るくない食事なんだからさ、ね、切っちゃおうよこのコード」
伸　一「ダメ」
瞳　「伸一さん、あたし帰ります」
伸　一「えっ・・・だって、大丈夫なの？」
次　郎「いや、そりゃ帰った方がいい。暗い所にあんまり長く居るとお腹の赤ん坊にも良くないし」
瞳　「次郎さんは黙ってて下さい」
次　郎「はい・・・」
瞳　「あたし、誰かさんの家庭を壊したいなんて思ってないんです。あたしだってその事は承知だったんだし・・・さっきは取り乱しちゃったけど、あたし自分で自分を惨めにしたくないし・・・だから帰ります」
伸　一「いいの、それで？だって何時かはハッキリさせなくちゃいけないことでしょ？子供のためにも・・・」
瞳　「（ポツリと）嘘だもん」
伸　一「はっ？」

瞳　「お腹の赤ちゃんの事、嘘なんです」
次郎「嘘・・・」
伸一「嘘だったの？・・・・」
瞳　「誰かさんがどんな反応するか、それを見てみたかっただけなんです」
次郎「（無理に笑って）い、いけないなァ、そんな、大人を試すような事をしちゃいけないなァ・・・」
瞳　「・・・次郎さん」
次郎「えっ、えっ？」
瞳　「安心しました？」
次郎「えっ、えっ、何の事かな？」

短い間。

瞳　「・・・あたし、もうちょっと居てもいいですか？」
次郎「えっ、もうちょっと？」
瞳　「なんか、白黒ハッキリつけたくなってきました」
次郎「し、白黒？白黒って何の白黒かな、伸ちゃん？」
小夜子「面白そうな話ね、あたしも伺いたいわ」
次郎「別にそんな面白い話じゃ無いと思うよ」

小夜子「あなた言ったでしょ？全部話します何も彼もお話しします
って。だからあたし、こんな得体の知れないもの食べなが
ら、今まで待っててあげたのよ」
千恵子「得体の知れないものって、何？」
伸　一「暗くて良く見えないって事でしょ」
小夜子「さァ、早く聞かせてよ」
次　郎「何もお前、こんな真っ暗な中で話ししなくてもさ・・・」
小夜子「真っ暗な方がいいんじゃない？あなた、今のあたしの顔見
たら腰抜かすわよ」
瞳　「そうですね、いい機会だから何も彼もお話ししましょ、次
郎さん」
小夜子「ええ、聞かせて頂きますわ、次郎さん。・・・あなた、聞
こえてるの？・・・ちょっとあなた！」
次　郎「次郎さんは帰りました」
小夜子「そこに居るじゃないの！トコトン馬鹿ね、アンタ」

ドアを開けて電気屋が入って来る。

電気屋「今晩は。かもめさん。もうお休みですか？・・・電気屋で
すけど」

次　郎「あっ、で、電気屋さんだァ！」

伸一、ブレーカーを上げる。

明るくなる。

電気屋、自分を注視している人々に気付いてたじろぐ。

電気屋「えっ？・・・な、なんか、来ちゃいけなかったスか？」

次　郎「遅かったじゃない！待ってたのよ、電気屋さん。これよこれ、これが問題のクーラー！」

電気屋「（煙を吐いているクーラーに又たじろいで）ウワッ、・・・・暖房入れてるんスか？」

次　郎「暖房になっちゃったのよ、早くなんとかして！」

電気屋「・・・ああ、こりゃダメだ」

伸　一「ダメ？」

電気屋「この型の部品はもう無いっスよ。買い替えるか置物にしとくか、どっちかっスねェ」

伸　一「買い替える？買い替えろって言うの？今のウチの経済状況で？」

電気屋「だってこりゃもう使えないっスよ」

伸　一「冗談じゃない。そんな金無い。どうしても買い替えろって

言うんなら金貸してくれ！」

電気屋「そりゃ銀行に言って下さいよ。ウチは電気屋なもんで。そンじゃ（ペコリと頭を下げる）」

次　郎「どこ行くの？」

電気屋「帰るんスけど」

次　郎「そんな、何も急いで帰る事無いじゃない？もう少し相談に乗ってよ。なんなら御飯たべてく？塩からのてんぷら好き？」

電気屋「（顔がほころび）ハアッ、大好物っス」

次　郎「（驚いて）食べたことあんの？」

電気屋「ウチの女房良く作りますよ。だけど、悪いなァ・・・」

次　郎「悪くない悪くない、ホラそこ空いてるから、そこ座って」

電気屋「そンじゃ、ちょっとだけ・・・アレ、暖房にしたままにしとくんスか？」

次　郎「もう切っちゃおう切っちゃおう、どうせ使えないんだから、コード切っちゃおう」

伸一、ブレーカーを落とす。

次　郎「・・・部屋暗くすると少しは涼しいよね」

電気屋「今夜雨だって言ってましたけどね」
次　郎「アラ、そンじゃ泊まってく？アハハ、いや、やっぱり電気屋さんだけに心が明るくなるねぇ、あんたと居ると。まァ、一杯」

次郎、手探りでグラスを探してワインの空き瓶を注ぐ。

電気屋「そンで今日は、なんかの集まりっスか？」
千恵子「ええ、内輪の」
電気屋「ああ、内輪の。・・・えっ、内輪の？アレッ、そンじゃ俺が居ちゃいけねんじゃねぇの？」
次　郎「何言ってるんだ、君は今日から僕らの内輪だ。さァ飲んで飲んで」
電気屋「ああ、こりゃどうも。（グーッとグラスを呷って）アレッ、こりゃ空だ」
次　郎「あらっ、マスター、ホラお酒お酒！」
小夜子「何考えてんの、あんた」
電気屋「ハッ？」
小夜子「あんたじゃなくて、そっちの馬鹿」
電気屋「（次郎の方に）馬鹿って、旦那の事っスか？」

次　郎「（電気屋の方に）失敬だな君は」
小夜子「本当に往生際の悪い男ね」
　瞳　「呆れて物も言えません」
喜久江「大体口数の多い男は信用出来ませんのよ、皆さん」
幸　一「ママ、僕はあんな男にだけは成らないのです」
喜久江「そうね、成っちゃダメよ、コウちゃん」
千恵子「次郎ちゃん、そんな人生で恥ずかしくない？」
伸　一「ホントだよ」
健太郎「水を貰えますかな？」
小　春「もうみィんなにバレてんのよ、次郎ちゃん」
次　郎「やっぱり？」
電気屋「うーん、旦那、ここは潔く観念しないと」
次　郎「うん、そうだなァ・・・（気付いて）お前は何なんだ？大体お前は何でメシ食ってんだ？とっとと帰れこの役立たずっ！」
電気屋「（笑って）役立たずは良かったな」
次　郎「何がおかしいんだ、このイカれ電気屋！」
小夜子「瞳さん、だったわね？」
　瞳　「はい」
小夜子「あんな男のどこが良かったの？」

瞳　「魔が差したんです」
小夜子「まだ若いんだから大丈夫。幾らでもやり直しはきくから。これも勉強だったと思えば腹も立たないでしょ？」
瞳　「はい、犬に噛まれたと思って諦めます」
次　郎「エラい言われ方だ・・・」
電気屋「旦那、大体の事情は分かりましたがね、良かったッスよ、これくらいで済んで。ウチの親戚なんざァ裁判ですよ裁判。それ考えりゃアンタ」
次　郎「うん、そうだなァ・・・（また気付いて）何がだ？お前そんなに好きなら、そのてんぷら全部持ってとっとと帰れっ！」
電気屋「いや、全部は悪いッスよ、皆さんの分もとっとかなきゃ」
次　郎「どうせあったって誰も食わねぇんだよ、こんなもん！」
千恵子「あたしの料理にあたることないでしょ？」
伸　一「次郎ちゃん、少し黙ってた方がいいよ」
小　春「ノド乾いたぁ、お酒ぇ！」
健太郎「これはやっぱりアレですな、味付けが」
千恵子「だからアレって何なのよ！」
小　春「マズイって事でしょ。要するに」
健太郎「いやいや、儂はただそのう、水が一杯飲みたいなと・・・」

千恵子「小春さん、でしたっけ？」
小　春「ハイ？」
千恵子「あなた伸ちゃんの何なんですか？」
小　春「（食べながら）前の奥さん」
喜久江「小春さん、あなたよくお食べになれますわねェ、そんなにバクバク」
小　春「あたしどんな物でも、残すの嫌いなのよねェ、貧乏性って奴ね」
千恵子「それであなた、一体何しにここへ帰っていらしたんですか？」
小　春「まァいろいろとね、あったのよ事情が」
千恵子「どんな事情？」
小　春「イイじゃん、別に」
千恵子「聞かせて下さい。気になります」
小　春「どうしてそんなに気になるの？」
千恵子「あたし、伸ちゃんのフィアンセです」
小　春「あたし前の奥さん。どっちが立場うえ？」
電気屋「さァどっちスかねぇ・・・」
千恵子「あたしの方が上です」
小　春「でもあたし戸籍に載ってるわよ」

電気屋「あっ、じゃあ奥さんの方が上だ」
幸　一「前の、奥さんなのです」
電気屋「オッ、突っ掛かるねぇ兄さん。なんだ、あんたこの奥さんにホの字か？」
幸　一「（半分泣き声で）前の奥さん！」
電気屋「あっズバリだ、こりゃぁズバリだ！鋭いなァ、俺」
次　郎「いいから早く帰れお前」
伸　一「もう、どっちが上とか下とかさァ、そんな事意味無いじゃない？」
千恵子「伸ちゃん答えてよ、この人何しに帰って来たの？」
伸　一「いや、それは、だからね、この加藤さんの息子さんに結婚を迫られてだね・・・」
小　春「謝りに帰って来たの」
伸　一「・・・は？」
小　春「あたし、勝手に飛び出して、勝手に離婚届けを送りつけて、ごめんなさいって、謝りたかったの。加藤さんの事は、その口実。（笑って）大体、あたしがイヤなものキッパリ断れないと思う？」
伸　一「思わない・・・」
幸　一「イヤな、もの？・・・」

電気屋「こりゃァダメだ、こりゃァ脈はねぇわ」

小　春「だけど再婚の話があるなんて思わなかったなァ。いつでもそうよね、あたしって自分勝手ばっか・・・（頭を下げて）ごめんなさい」

伸　一「・・・」

小　春「幸せになってね。いい人じゃない？料理だって、まァ、慣れれば口に合ってくるよ。全部時間が解決してくれるって」

伸　一「・・・どうして家を飛び出したの？」

小　春「もうイイじゃん、そんなの」

伸　一「言ってくれよ、・・・何で？」

小　春「それは、伸ちゃんが、戸籍係りだったから」

伸　一「はっ？」

小　春「あたしホラ、私生児じゃん？お母ちゃんは芸者だったし。小春なんて名前、普通の親なら付けないもんね。・・・伸ちゃん、お役所で肩身狭かったんでしょ？」

伸　一「そんな事あるもんか！」

小　春「だってあたしの親父さんの事調べてたじゃない？知ってたんだよ、あたし」

伸　一「・・・どうして？」

小　春「次郎ちゃんに聞いたの」

電気屋「（舌打ちして）旦那、余計な事するねェ」
次　郎「うゥん、まァトラブルメーカーってとこかな・・・（気付いて）ほっとけよ！」
伸　一「僕が君のお父さんの事を調べてたのは、それは二人の為にそうしなきゃいけないと思ってね・・・」
小　春「イヤだったのよね、ホント。余計なお世話だったのよ。あなたと結婚したのはあたしでしょ？親なんか関係ないでしょ？・・・考えてもみてよ、今更親父さんに会ったって、一体何の話するの？私たち結婚しました、お祝い下さいって、そう言う訳？」
伸　一「そうだよ、僕はそうしたかった」
小　春「だったら今度はそうすれば？そこのお父さんはお金持ちみたいだから、クーラーぐらい買ってくれるわよ、きっと」
伸　一「（激しく）物が欲しかったんじゃない！・・・祝福して欲しかったんだ・・・」
小　春「してくれる訳ないでしょ。迷惑そうな顔して追い返されるだけだって。あなた分かって無いのよ、私生児って何だか。誰にも喜んで貰えない存在なの、あたし達は」

短い間。

喜久江「あたくしも昔、お座敷に上がっておりました」

全員、顔を上げる。

喜久江「ついでに申しますと、あたくしも私生児です。小春さん、あなた謝りに帰って来たっておっしゃってたけれど、それだけじゃありませんわね？本当に木島さんとやり直してみようと、そうお思いになったんじゃありませんの？」

小　春「・・・まっ、あの時は」

喜久江「あなた、それでおよろしいの？」

小　春「え？」

喜久江「木島さんがこのお嬢さんと再婚なさって、あなた本当にそれでおよろしいの？」

小　春「ええ、モチ」

喜久江「じゃどうしてここから出てお行きにならないの？こんなおいしくもない料理を食べてまで、ここに残ってる事無いじゃありませんか？」

千恵子「（舌打ち）」

喜久江「自分に正直にならなくちゃ駄目。下手な強がりなんかお止

めなさい。自分の事を哀れんで、それで強情を通すなんて馬鹿な話よ」

千恵子「出てって下さい。皆さんお帰り下さい。伸ちゃん、電気点けて。小春さん、あなたもお帰りになって下さい。・・・（叫ぶ）伸ちゃん、電気点けて！」

伸一、ブレーカーを上げる。

明るくなる。

喜久江と健太郎を除いて皆、席を立つ。

小春も立ち上がる。

喜久江「（一喝）帰っちゃいけません！」

千恵子「ババァッ！」

喜久江「ババァにゃババァの考えがあるっ！ヒヨッコはすっこんでなっ！」

皆、弾かれてように席に戻る。

伸一、慌ててブレーカーを落とす。

喜久江「あなた、ここで帰ったら一生後悔するわよ。もうやり直し

はきかないのよ。木島さんも、このまま小春さんを帰して、あなたそれで平気なの？」

幸　一「ママ・・・」

喜久江「コウちゃん、あなたはもう圏外なの。だから男らしく諦めなさい」

幸　一「け、圏外って・・・」

喜久江「小春さん、分かるわね、私の言う事」

短い間。

電気屋「（伸一の方に）旦那、正念場だよ」

次　郎「お前、楽しんでるだろ？」

電気屋「嫌いじゃないんスよ、こういうの」

千恵子「どうするの、伸ちゃん」

伸　一「・・・ぼ、ぼくは、そのう・・・」

小夜子「ちょっと待って」

全員、小夜子の方を見る。

小夜子「今の流れだと大勢（たいせい）は小春さん復縁派に傾いて

るみたいだけど、それじゃ千恵子さんはどうなるの？」

幸　一「そ、そうなのです、僕もそれが言いたかったのです！」

小夜子「どんな事情があったにしろ、小春さんは家庭を捨てた事に違いはないでしょ？みんな、その事をもう一度良く考えてみて。小春さんは自分から幸せを放棄したのよ。一人の主婦として、その生き方にはやっぱり賛成出来ないな」

幸　一「ど、同感なのです」

次　郎「君は何だ、フラれた途端に小春ちゃんの事を悪く言うのか？」

幸　一「そ、それとこれとは話が違うのです！」

瞳　「だけど普通の主婦と小春さんとは違うんじゃないでしょうか」

小夜子「どう違うの？」

瞳　「小春さんは、子供の頃からきっといろんな辛いことも多くて、結婚してからも私たちには分からない悩みも一杯あって、だから、私たちとは同レベルで考えられないと思うんです」

小夜子「だけど、人それぞれ色んな運命を背負って生きてるんじゃない？あたしだってあんな馬鹿を亭主に持ったんだから、そういう意味では一般の主婦から見れば大きなハンデだわ」

次　郎「（唸る）説得力あるなァ。（腕を組む）」

皆、それぞれに同意の声を出す。

喜久江「けれど過去は過去として、大切なのはこれからの事じゃありませんの？」

電気屋「どうでしょう、どちらが幸せを勝ち取るべきか、ここは一つ決を取ってみると言うのは？（鞄から懐中電灯を取り出す）」

次　郎「お前、それは違うんじゃないか？」

電気屋「いや、こりゃあくまでも参考意見として。もちろん最終的に決断を下すのは（伸一を照らして）そちらの旦那なんスけどね、だけどホラ、あんまりこういう決断ってのが得意なお方じゃ無いようなんで。取り敢えず参考として、ね。それじゃいいスか、皆さん。当事者の御三方は除いて・・・」

健太郎「いや、一応私も当事者の父と言う事で除いて頂きたい」

電気屋「そンじゃそちらの大旦那も除いて・・・」

次　郎「お前もいいだろう、入んなくて」

電気屋「そうスね、そンじゃ俺も進行役と言う事で除くとすると・・・（懐中電灯で照らす）残り5人か・・・じゃ、5人で

挙手と言う事で。まず、小春さんが選ばれるべきだと思う方は手を挙げて下さい」

喜久江と瞳が手を上げる。

電気屋「はい、それじゃ千恵子さんが新しい奥さんに成るべきだと思う方？」

小夜子と幸一が手を上げる。

電気屋「（次郎を照らして）旦那ァ、困るなァ・・・」

次　郎「ちょっと、あのう、もうちょっと時間頂戴。俺もさァ、いろんなシガラミがあって、立場辛いのよ」

千恵子「あのう」

電気屋「はい？」

千恵子「警察を呼びますよ。早く帰って頂かないと」

電気屋「・・・あっ、はい、それじゃ、俺はこれで。どうも、御馳走様でした。・・・（次郎に）結果、分かったら電話してね」

次　郎「競馬じゃないんだから。大体不謹慎なんだよ、お前は」

電気屋、ドアを開けるが、中に居たまま閉めて隅に潜む。

千恵子「皆さんも、本当にお引取り頂きたいんですけど」
小夜子「でもね、千恵子さんあたしはね・・・・」
千恵子「（一語一語はっきりと）本当に。・・・お願いします」
健太郎「いや、居て頂きなさい」
千恵子「パパ！・・・あたし達は見世物じゃ無いの」
次　郎「見世物にしたのはあの電気屋なんだよね」
健太郎「誰も見世物だとは思っとらんよ。だがね、木島さん。あなたも男なら、皆さんの前で堂々と意見を言うべきじゃありませんかな？中途半端な気持ちで娘と結婚されても困る。男として、自分の言葉に責任をもって頂きたい。だから、皆さんには残って頂いた方がいい」

稲光。
小夜子と瞳が軽く悲鳴をあげる。
雷鳴。雨の音。

次　郎「・・・雨だ。・・・本当に降って来たんだ・・・」
千恵子「・・・あたし、聞きたくない」
健太郎「千恵子・・・」
千恵子「聞いたってしょうがない、あたし絶対に伸ちゃんとは別れないから！」
喜久江「でもね千恵子さん・・・」
千恵子「伸ちゃんが小春さんを選んだって渡さない。きっとあたしの方に振り向かせてみせるから。（小春に）だって、あなた自分から居なくなったんでしょう？逃げ出したんでしょう？伸ちゃん捨てたんでしょう？・・・だったら、どうして今更戻って来るの？今更戻って来て何がしたいの？あたし達のことお祝いしてくれるの？それとも邪魔しに来たの？」
健太郎「止さんか、千恵子」
千恵子「だって、今日目茶苦茶じゃない、せっかく楽しみにしてたのに、全部台無しじゃない・・・」
小　春「・・・ごめんなさい」
千恵子「謝ってくれなくていいから、今すぐ出てって」
小　春「・・・ヤダ」
千恵子「・・・え？」

小　春「・・・雨だもん」
千恵子「伸ちゃんはあなたとはやり直さないわよ」
小　春「外は雨なの。あたし濡れるの嫌いなの」
千恵子「伸ちゃん、言ってあげて。この人、言ってあげなきゃ分かんないみたい・・・伸ちゃん！」
伸　一「・・・伸ちゃんは、帰りました」
次　郎「それダメだって。さっき俺が使ったんだから」
千恵子「・・・どうして何にも言ってくれないの？・・・本当にこの人とやり直すつもりなの？」
伸　一「・・・」

短い間。

喜久江「雨が降って、いくらか涼しくなりましたわね」
健太郎「いやあ、まったく。・・・今日の暑さには、閉口しましたな」
喜久江「こうやって、灯りの無い所に居りますと、何だか懐かしいような心持ちになってまいりますから、不思議でございますわね」
健太郎「そうですなァ。昔の夏には停電がつきものでしたからなァ」

喜久江「ええ、台風が来ますと決まって停電。お盆で田舎に帰りますでしょう、そうしますと、仏間と次の間の襖を外して、従兄弟達が布団を並べてズラーッと寝るんですの。ほら、台風の大きいのって、大体そこら辺りに来るじゃありませんか。そうすると停電でございましょう？まだ早いのに皆布団に入れられて、だけど、何だか心がウキウキしてとっても眠れないんですの。ちょっとした事がもうおかしくて堪らなくて、一生懸命堪（こら）えるんですけど誰かがきっと我慢出来なくなって、それで皆が笑い出して、おばさんに怒られて（笑う）・・・」

健太郎「おかしかったと言えば、あれは空襲の晩だったんですがね、皆もう慣れっこになっちゃって、防空壕なんてあなた、面度臭くて入りゃしない。辺りには爆弾が落ちてるってのに、家の親父とお袋は偉かったですなァ、電灯に覆いを被せて、近所の叔父さん達と麻雀打ってましたよ。親がそんな調子でしたから私だって逃げやしない。横に座って眺めてた。確か、あれは銭湯の親父でしたか、当たりだァッ！て叫んだ瞬間隣りン家に直撃弾が来て、全員部屋の隅まで吹っ飛んだ。あの時はおかしかったですなァ、皆真っ暗の中でゲラゲラ笑いながら麻雀パイを集めてました」

電気屋「俺はちょっとだけ少年院に厄介になってた事があるんスけどね、あそこも夜が早くてねェ」
次　郎「（驚いて）だっ、誰？誰が少年院に居たんです？」
電気屋「（自分の顔を下から照らして）電気屋です」
次　郎「お前、まだ居たのかっ？」
喜久江「暗い所ってほんと、いろんな事を思い出しますわね」
健太郎「今じゃ昼も夜もありませんからなァ。暗闇の消失は、一つの文化の喪失ですな」
喜久江「あら、いい風・・・」
小夜子「・・・ねぇ、初めて男の子と暗い所へ行ったの幾つの時だった？」
瞳　「小学校五年生です」
小夜子「・・・早いのね」
瞳　「奥さんは、幾つでした？」
小夜子「言いたくない・・・」
次　郎「俺、暗闇って言えば思い出すのがさァ・・・」

千恵子がブレーカーを上げる。
明りがつく。

次　郎「・・・なんか、無惨って感じ・・・」
千恵子「皆さん、お引取り下さい」

皆、不服そうに互いの顔を見合う。

千恵子「（激しく）お引取り下さい！」

激しい稲光！
悲鳴！
凄まじく雷鳴！
明りが消える。

次　郎「あっ、停電だ！」
喜久江「停電よ、お父様、停電ですわよっ」

皆、歓声を上げる。

千恵子「・・・あなた達、一体何なの？」
電気屋「停電って、あるんスねぇ今でも」
瞳　「台風ですか？」

幸　一「いえ、台風は来ていなかったと思うのです」
喜久江「ああ、いい風」
次　郎「さっきの話なんだけど、暗闇って言えば俺が子供ン時にね、
　　―」
千恵子「（遮って）帰って！早く出てって！伸ちゃん、この人達追
　　い出して！」
伸　一「・・・外、雨だから・・・」
千恵子「雨でもいい！この人達全員追っ払って！」
伸　一「（怒鳴る）ここは僕のレストランだから！」

一瞬空気が固まる。
皆、驚いている。

伸　一「・・・雨が小降りになるまで居て貰うから・・・」
千恵子「・・・そう・・・分かった。だったら小春さんだけでいい。
　　傘を貸してあげて」
小　春「（溜め息を吐いて）貸して、伸ちゃん。お嬢様、ヒステリ
　　ー起こして倒れちゃうわよ。どうもご馳走さま、とっても
　　珍しいもの頂きました。お父さんまたね、今度二人っきり
　　で会おうね。そンじゃ皆さん・・・（幸一に）御免なさい

ね、あたし、酷いことしちゃったね・・・」

幸　一「・・・いえ、もう、いいのです。・・・（帰りかけた小春に）小春さん・・・どうか、あのう、幸せになって頂きたいのです・・・」

小　春「（微笑んで）サンキュ・・・伸ちゃん、貸して、傘」

暗闇の中でしばらく見詰め合った後、伸一がノロノロと動き出す。

健太郎「・・・あなたのお母様、お名前は？」

小　春「・・・えっ？」

健太郎「お母様のお名前」

小　春「・・・本名は春江。お座敷には春奴で出てたけど・・・」

健太郎「春奴・・・」

小　春「それがどうかした？」

健太郎「木島さん」

伸　一「はい？・・・」

健太郎「千恵子との話は無かったことにして下さい」

千恵子「パパ？」

健太郎「・・・娘を二人まで、あなたに嫁がせる訳にはいきません」

間。

小　春「・・・うそ・・・・」

千恵子「嘘よ、パパ・・・ねぇ、冗談よね？」

健太郎は答えない。

千恵子「・・・そんな、そんなの・・・・！」

千恵子、外へ駆け出て行く。

次　郎「（幸一に）急げ青年！」

幸　一「はい！・・・（行きかけて）えっ？で、でも、どうして僕が？」

次　郎「この雨の中を追いかける体力はお前にしか無い！行けっ！」

幸　一「わ、分ッかりましたっ！」

幸一、アタフタと追いかけて行く。

電気屋「いやぁ、こういう展開は、流石に読めなかったっス・・・」
伸　一「・・・お父さん？・・・」
小　春「なんでそんな嘘つくの？」
健太郎「・・・バレましたか」
伸　一「えっ？？」
小　春「娘さん可哀相じゃない」
健太郎「いや、あれで良かったんです。あれはあれなりに良く分かっておったんです。ただ、引っ込みがつかなくなって、強情を張っておっただけなんです。・・・しかし、これからの事を考えますと、また、胃が痛みますが・・・」
小　春「馬鹿ねぇ・・・お水飲む？」
健太郎「頂けますか？」
小　春「電気屋さん、懐中電灯貸して」
電気屋「俺も行きます。喉カラカラになっちゃった」

二人、奥へ退場。

伸　一「なんか、凄く申し訳のない事になっちゃったような気がするんですが・・・」
健太郎「木島さん」

伸　一「はい」
健太郎「儂がもう少し若ければ、一発ガツンとあんたを殴っとるところだ」
伸　一「（たじろいで）ご、ごめんなさい」
健太郎「（声を荒げて）男だったらしっかりなさい！」
伸　一「は、はい！」
健太郎「あんたの場合は気が優しいのを通り越して小心者過ぎる。それが一番人を不幸にして行くんです。惚れた女も掴まえておれんで、何が男かっ！・・・失礼。（ドアに向かう）」
伸　一「（慌てて）あっ、あのお水は？それに外はまだ雨が・・・」
次　郎「しかもお父さん、そんな格好で・・・」

健太郎、戸口で伸一に振り返る。
伸一と次郎、再びたじろぐ。

健太郎「・・・どうか、小春をよろしく」

健太郎、一礼して去る。

伸　一「は、はい・・・はいっ？・・・（次郎に）い、今、何て言

った？」

次　郎「・・・ごめん、俺二日酔いで頭よく回んない」

小春と電気屋が戻って来る。

小　春「アレッ？お父さんは？」

喜久江「私もこれで失礼致しますわ」

小夜子「駅までご一緒します。（瞳に）あなたどうする？」

瞳　「帰ります、あたしも」

小夜子「その辺で車拾いましょ」

伸　一「あの、幸一さんは？」

喜久江「子供じゃあるまいし、自分でなんとかしますでしょ。御免遊ばせ。（二人に）お腹空きませんこと？」

小夜子「空きましたっ、もうペコペコ！」

瞳　「駅前においしいレストランありますよ」

喜久江「参りましょ、そこに参りましょ。（伸一達に）御免遊ばせ」

三人、ドアを開けて退場する。

電気屋「奥さんと愛人はうまくやっていけそうじゃないスか」

次　郎「・・・お前、いつまで居るの？」
電気屋「（伸一と小春を見て）さっ、俺も帰んなきゃ。（次郎に）旦那、行きますか？」
次　郎「俺はいいよ」
電気屋「いいからいいから！」
次　郎「だって降ってンだろう、雨が」
電気屋「もう、気が利かねぇなァ。一杯奢るからお出でって」
次　郎「・・・奢りなら行くよ。・・・（伸一に）伸ちゃん。まァ、とんだ事になったねって言うか、良かったねって言うかさァ・・・」
電気屋「もういいから。どうせ気の利いた事なんか言えっこないんだから、早くお出でって！」
次　郎「お前さァ、短時間のうちに俺と言う人間を見透かしちゃったような言い方は止めてくれよ。なんかヤダなァ、俺がちっぽけな人間みたいで・・・」

二人、退場する。
伸一と小春の二人が残る。
雨音。
小春、窓へ歩み寄る。

小　春「・・・ほんと、いい風」

伸　一「お、お前さァ、ほんとにさァ、そのう、僕ともう一度さァ・・・」

小　春「ねぇ、伸ちゃん」

伸　一「アっ？」

小　春「（微笑んで）久し振りに、お熱い夜ってのは、どう？」

小春、ゆっくりと伸一に近付き、二人、静かに抱き合ってゆく。

窓から次郎と電気屋が顔を出し、ニッコリと微笑んで顔を引っ込める。

幕